

薬師寺通報

秋彼岸によせて

堀士大虚



作麼生說破

そもさんせつば
せつば||説明いたしましよう

「僧侶の戦争加担」つて?

この夏、京都市では気温三十度を超える真夏日が年間百日を超えました。百年前の平均真夏日数が六十日ですから、今

や京都も沖縄や南西諸島並です。幾分朝晩は涼しくなつたとはい、御自愛専一にお過ごしください。檀信徒の皆様におかれましては益々御清祥のこととお慶び申し上げます。

今春、境内で転倒した際に左肩を骨折しました。役員様や檀家様には入院、退院後も寺の護持にご尽力頂き有り難く厚く御礼申し上げます。地域社会では何かが壊れてしまつた時に近隣の人が直したり、友人が引つ越す時に手助けしたり、子どもの友だちが家に遊びに来た時に親が食事を勧めるなど

資本主義の論理とは違つた「助け合い」をします。資本主義は、それらをすべて「サービス」という対価に変えます。

その結果、私たちは無力な消費者となり、お金がないと何もできない存在になつてしまします。仏教の「無財の七施」の中の「身施」は、自分の体を使つてできる奉仕を意味します。金銭や物を与えるのではなく、自分の行動や労力を差し出すことです。ゴミ拾い・介助・ボランティア・地域活動に参加すること等、「身施」は人を助けながら自分と社会全体を豊にする実践です。現代の日本のように孤独や分断が問題になっている社会での効果は非常に大きいのではないでしようか。

孤立や貧困などで既存の制度やサービスにアクセスできなければ、他者に対するお心遣いを巡らせ、心地よいお彼岸をいざいます。他者に対するお心遣いを巡らせ、心地よいお彼岸をお過ごしくださいますよう、皆様のご健勝を祈願いたします。

令和七年
秋彼岸第四十四号

発行所
京北細野町上ノ町三十三
岸池山 薬師寺

んだ僧侶や、辺境の寺や農村では、檀家の出征・戦死に心を痛めつつ祈念を続けた住職も多かつたのです。

臨濟宗の僧侶の中にも戦前・戦中に武士道と禅を結びつけ、「生きて帰ると思うな。生きて帰ることを考えるから卑怯になら」、「禪は武士道の母胎である。兵士よ、無心に死ね」、「大東亞戦争は仏法の大道である」といった出征兵士への檄文は、軍国主義の思想的支柱となり国家の戦意高揚に利用されました。

それは二度と同じ過ちを繰り返さないという誓願でもあります。日本の僧侶たちが「戦争に協力し、その後どう生き直そうとしたか」をることは極めて重要な事例です。仏教では戦争の根源を「欲望・怒り・無知」に置きます。今現在の世界各地で続く戦争は、一握りの有力者が自分の手柄とメソツのために起こした戦争です。お釈迦様は争いの根本原因は「権力欲・報復心・偏見」であり、暴力ではなく智慧と慈悲が争いの解決に不可欠だと仰いました。また、自分の国も他国も一体化して相互依存の関係にあるという「縁起」の思想は、敵を作る思考を解きほぐす役割を持ちます。

歴史的に多くの宗派が聖戦を肯定した苦い経験を持ちますが、仏の教えを広げ、世界中の人々に過去の恨みを捨て去つて戦争は決して起こしてはいけないと言い続けるのが僧侶の努めです。聖職者は過去を直視し、懲悔する勇気を持ち、不正義の前には沈黙せず、常に苦しむ人々の側に寄り添つていてほしいのです。この世界は、闘いと、言い争いと、心配事と、悲しみと、物惜しみと、誹謗中傷に取り憑かれていく。

やがて必ず喪失にたどり着くまを見て、私は空くなつた。
——『スッタニパータ』「闘い」と「武器」の節

令和七年度秋季彼岸会法要

十時半より受付いたします